天氣が惡るいので、誰も正月でも遊びに來ない。
夜になると電燈がないのでランプをともす。
隱元豆の煮たのをおいしく食べた。
女は色々と言を左右して、僕に歸宅をすすめる。
『私があなたをそゝのかして、逃げたなどゝ思はれては、あなたのお父さんに濟みません』などと言ふ。
雞卵の吸物を拵へて、二人で一緒に御飯をたべた。
雪が吹き込む。
隙き間洩る風は寒い。
再び布團を肩に掛けて、外に出て、見送つてくれる女と手を組み合はせながら、雪明りの暗い歸路に着いた。
毛糸のショールを目の下まで、女もやつてゐる。
吹雪が正面にあたると、鼻がちぎれる程痛い。